

平成25年度 防災とボランティア展 トークセッション報告

高松市市民活動センター

●トークセッション「東日本大震災で見た災害ボランティアの現場」

日時:1月16日(木) 13:30~15:00

場所:四番丁スクエア1階会議室

内容:第1部 パネリストの活動発表

第2部 トークセッション「私たちのまちで大規模災害が起きたら」

パネリスト(順不同)

高松市消防局 中井 聡さん

高松市防災女性チーム こども女性相談室長 鎌田 菊乃さん

高松市危機管理課 本田 良士さん

二番丁地区コミュニティ協議会自主防災組織連絡協議会 会長 川口 秀明さん

高松市女性防火クラブ連絡協議会 会長 田所 雪子さん

NPO 法人 SONAE-NET 庵谷 文博さん

高松災害ボランティア連絡会 大須賀 誠さん

高松市社会福祉協議会 林田 篤彦さん

主催: 高松市

第1部 パネリストの活動発表

<高松市消防局 中井 聡さん>

今日は個人災害ボランティアの立場で参加。

自分自身の活動は 17 回 120 日。2011 年 3 月 11 日は職場で災害の映像を見た。4 月 2 日に休みをとって被災地へ。戻ってきてもまた早く被災地支援に行きたかった。

高松市の消防士(の有志)を○人連れて行った。

企画した「あの日を忘れない…」プロジェクト「被災地を思い、被災地に学ぶフォーラム」in 香川には 2 日で 1 万人以上が訪れた。そのとき高校生から

「あなたたちは十分支援してくれました。この震災を忘れずに、あなた達の地元で役立ててください。」といわれた言葉が忘れられない。

行くようになったきっかけは、阪神大震災の時、何もできなかった後悔があり、3.11の映像を見たときにやろうと思った。大変だったことは何もない。大変だと思ったこともない。-10度の車の中で寝たり泥水で顔を洗ったりはしたが、慣れればなんともない。自分でできる事しかやってない。むしろ感動を嬉しい出会いだけ。

震災以前に好きな言葉は「自由、平和、愛」だった。

今はそこに「ありがとう」が加わった。



<高松市防災女性チーム こども女性相談室長 鎌田 菊乃さん>



陸前高田市復幸応援センター 短期派遣活動(全国青年市長会)

および 災害ボランティア活動への参加の報告。

平成24年9月24日～10月1日(8日間)

岩手県陸前高田市復幸応援センター(9月25日～26日)

岩手県陸前高田防災ボランティアセンター(9月27日～30日:ボランティア休暇)

- ◆復幸応援センター:お金と物の支援は足りてきている。行政として全域でつながるのは難しい。
- ◆米崎中学校仮設住宅自治会:自分が中心になってやる(役割を持たせる)ことの大切さ。生活の質,新たな出会い。仮設の暮らしを通じて,子どもも大人の共同生活について学んでいる。助かった人は,冷静,周りが見える人,あきらめないこと。12.5mの防潮堤を造る話があるが,海が見えなくなる方が怖い。
- ◆西風道(ならいみち)仮設住宅自治会:ボランティアを頼りにするのはもう終わり。自発的にしないといけない。月3回,お茶っ子の会を開催。高一中の避難所=1,000人 大人は体育館,子どもやお年寄りも教室に振り分ける。役割を作ると一生懸命やってくれる。人は動く。草刈=最初はボランティアを募る→意識が変わる
- ◆高田高校第二グラウンド仮設住宅 サロン:避難所は300人居て座ることもできなかった。おばあさんも座れなかった。壁のような津波。子どもたちは身体の不調を訴える。指定の避難所ではないので3月いっぱい出て行った。下着がないのが一番困った,食べ物があった。皆で団結して市と交渉していった。
- ◆米崎中学校仮設住宅デイサロン:渋滞しない広い道路が必要。下着が必要だった。「3mの津波」に騙された。防潮堤が6mだったので急がなかった。6m以上と聞いていたら,もっと早く逃げたし,助かった人も多かっただろう。
- ◆「げん気ハウス」というテントの集会所:不平・不満は3ヵ月後から。個が出てくる。仮設住宅が当たらない。意外にも子どもは我慢している。体育館で暮らしていない人が代表。→問題(「…代表で,問題があった。」ということでしょうか?)。食べることと同じくらい睡眠は大事。団体生活で守らなければいけないのは時間。手洗いとうがいは徹底してやった。ただでもらえることに慣れてしまっている。
洋服をもらったが,とても着られないようなものをもらった
時は情けなかった。高松市は大きな津波の被害はないだろうけれど,四国の支援基地になる重要なところ。
- ★自分の目でみて津波の怖さ実感。ボランティア運営や情報発信の重要さを感じた。「風化させない」こと、「忘れない」こと。

<高松市危機管理課 本田 良士さん>

今後30年以内の発生確率は、南海地震で60%程度、東南海地震で70%程度とされている。

南海トラフの巨大地震に関する香川県の想定:

最大震度 6強

最大津波高 3.8m(志度湾に面した牟礼町)

高松港における最大津波高 2.7m

減災対策

家屋の耐震化、家具の転倒防止策、家庭用消火器の設置、沿岸部では津波避難ビルを活用した避難などで、被害を大幅に縮減可能

四国の防災対策、復旧・復興推進の拠点としての高松→太平洋側被害大予想

物流機能、重要拠点機能、応援・受援機能、復旧・復興に関するヘッドクォーター機能、ライフライン機能

危機管理センター等の整備(H29年末竣工目指す。8階建て)

一般家庭:平常時にできる備え/自宅の耐震化/地震保険加入



<二番丁地区コミュニティ協議会自主防災組織連絡協議会 会長 川口 秀明さん>

平成10年の水害で、男木、女木に続き高松が大きな被害に。

平成18年から年1回、地域挙げての防災訓練を行ってきている。

二番丁、四番丁、日新地区が合併して新番町小学校開校と同時に新体育館ができ、避難所運営を訓練に取り入れるようになった。

地域住民とともに訓練を4回行ない、皆ずいぶん慣れてきた。

避難所:民政委員が受付担当。自治会長も役割を担う。

炊き出し訓練は今年まで8年、毎年行っている→食を共にすることで生まれる絆をつくっていく。

二番丁地区の避難場所は各地区ごとに振り分けられ、各地区にリーダーがいる。自治会長がサブリーダー。市の職員もサポート。

昨年、県の助成により無線機を購入。親機+子機6台。

親機がないと、がれきなど障害物があると子機同士では通じなくなってしまう。

親機を使えば、二番丁地区全体を網羅できることをテスト済み。

(会場から質問:「他の地区でも購入しているのですか?」答え:「購入しているところもあると思うが…自分たちの思いで買った」)

実際に災害無線の実演。番号は22番で固定。混乱しない。

<高松市女性防火クラブ連絡協議会 会長 田所 雪子さん>

高松市にある女性防火クラブはいま34クラブ、総勢6735人。

南海トラフ大地震を想定して、火災予防知識、住民の防火啓発、初期消火啓発などを行っている。

<具体的な活動>

- 住民への火災警報器普及啓発パンフ配布、防火用品普及活動
- コミュニティセンターを通じて消火器普及
- 消防団出初式での啓発活動
- 年末夜警への支援
- 応急手当の知識の普及
- 会員は普通救命講習も受講
- 防災訓練での炊き出し
- 避難場所ルート、連絡方法確認
- 家庭での被災時家族集合場所を決めておくことなどを奨励

<活動目的>

被害を出来るだけ少なくする。公共の支援に頼ってばかりではいけない。自分の命は自分で守り、地域住民同士の助け合いが必要。「自分たちのまちを自分たちで守る」という地域住民一人ひとりの意識一。共助の活動、地域のつながり、隣近所の重要性を伝えながら、女性特有の優しさをもって活動していきたい。

<NPO 法人 SONAE-NET 庵谷 文博さん>

1999年、消防、NHK 職員と琴平町からスタート
防災防犯マップづくり→防災と防犯を一緒にした
ものが無かった→兵庫県尼崎からもアドバイザー
として呼ばれる

災害時ボランティアの保険の問題

高松の過去の高潮被害…3000人くらいが動けな
くなった→南海トラフ地震はその10~20倍。

高松のことは高松で処理するしかない。

災害ボランティアや避難所運営をよくわかってい
ない人が多い→もっと大規模な訓練に！

ルール:アゴアシマクラと保険は自分で事前になんとかする。

支援要請あったとき保険に入っているか？自分で行く人は自分で保険を！

高知の黒潮町の例:

高い図書館を建て、そのうえを避難場所に。

34mの津波が出ると言われている。

職員全員が地域に入って班ごとに防犯カルテ、避難コースつくっていった。

今から仮設住宅の場所や遺体安置所の場所まで探して、高台へ商店街移転先も探している

→災害後、数か月で普通の生活にもどれる。

高松空港は別格。唯一被害のない想定。物流拠点になる。



<高松災害ボランティア連絡会 大須賀 誠さん>



平成16年8月31日夜中に高潮があり、翌朝は水浸し。当時ボランティアセンター長だった大須賀さんに、ボランティアの受け皿をセンターで引き受けてくれないかと言われた。

9月1日松島地区が一番ひどかったボランティアセンターをつくったが、センター運営スタッフ足りない。

9月2日県社協が中心に高知や日本財団からもヘルプがきた。

ボランティアのニーズが日増しに増えていった。保険はセンターで入って(個人負担なし)のべ3千数百人。

9月12日 体育館での活動が終わったが、終えることも難しい。

災害は続いている。1週間後くらいにまた片付け、ボランティアセンター終わり。

もしも地震災害がきたら？状況まったく変わるだろう。

具体的に厳密に考えて想定していかないと。

香川自体は被害が少ないことが想定される。支援に行けるようにしておくこと。

<高松市社会福祉協議会 林田 篤彦さん>

市社協としての活動

被災地に全国の社協から現地の社協に支援にいった。

香川からも宮城の災害ボランティアセンターに8名は県派遣され、運営支援を行った。

テントで寝泊まりするボランティアが、朝早くからボラセンの前に並んで仕事が割り振られるを待っている。このボランティアをどうさげばいいのか？と思った。

災害ボランティアセンターの勉強をさせてもらっているという気持ち。

実際に関わってとても参考になった。

